

富の根源は仁義道德にあり

渋沢栄一の『論語と算盤』が問うもの



渋沢 栄一
(しぶさわ・えいち)

1840年、現在の埼玉県深谷市に生まれる。
幕臣となり、67年徳川昭武に随行してヨーロッパ諸国を歴訪。
維新後の69年、明治新政府に仕官。民部省、大蔵省に属した。
73年、大蔵省を退任後、第一国立銀行(現・みずほ銀行)をはじめ
約500社もの企業、600もの社会公共事業の創設に参与し、前工業の発展に貢献した。
また、経済団体を組織し、商業学校を創設するなど実業界の地位向上に努めた。
1931年没(享年91歳)。

三十年先を予測することは難しい。

だが、三十年後に子どもや孫の世代に何かを残そうという「目線」を持つことならできる。三十年という長期投資を実践し、金融業界に一石を投じた commons 投資・渋沢健会長。

日本資本主義の父と言われる渋沢栄一の玄孫にあたる。

『論語と算盤』など渋沢翁の著作の数々が、

日々、年々、新鮮に心に響いてくると渋沢氏は言う。

ぶつかり合う利己主義をルールで調整しようとし、ますます混乱する現在の資本主義。

それとは異なる「道徳的資本主義」を、百年前に、渋沢翁は構想した。

本来の経世済民の精神を賦活するために、渋沢栄一思想をいま再び読み解く。

「仁」と「義」に基づく

道徳的資本主義

ただ空理に趨き虚栄に赴く国民は、決して真理の發達をなすものではない。ゆえに自分等はなるべく政治界、軍事界などがただ跋扈せず、実業界がなるべく力を張るように希望する。これはすなわち物を増殖する務めである。これが完全でなければ国の富はなさぬ。その富をなす根源は何かといえ、仁義道德。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ。ここにおいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめることが、今日の緊要の務めと自分は考えているのである。

【論語と算盤(処世と信条)】

渋沢栄一(一八四〇—一九三二)は明治の近代化にあつて、民間企業を發展させようと尽力した人物です。玄孫(五代目子孫)にあたる私が言うのも変ですが、大変な功績を残しており、生涯に五百もの企業と、六百もの社会事業の設立に関与しました。「日本資本主義の父」とも言われています。

二〇〇八年秋に起こったリーマン・ショックは、改めて資本主義の暴力的な側面を人々に見せつけました。いま、まさに資本主義の在り方を問われているときだと思いますが、実は、百年前も、ただ己の利殖に走ったり、拝金主義に陥ったりする風潮はありました。渋沢はそうした状況を憂い、「道徳的資本主義」を説いています。

道徳的資本主義……この言葉を初めて

聞いたときは、思いやりのある、優しい資本主義なのかなあというイメージを持ちました。ところが、研究していくと、そんなに生易しいものではない。実は非常に厳しい資本主義なんだ、と思に至りました。

いまの資本主義はルールが書いてあつて、ルール通りにすれば後はいいですよ、というもの。しかし、これはルールに逃げられるということでもあるんです。道徳というのは、ルールがあつてもなくても、自発的に何が正しい行いなのかを自分なりに考えを重ね、整理して、実行することです。「道徳」は言葉で言うのは簡単ですが、行うのは非常に厳しいものです。

また渋沢は、「仁」と「義」を重視しています。「仁義」とはどういうものか。「仁」とは思いやりや愛という意味ですが、中国古典研究家の守屋淳さんによると、「仁」という字は「人が二人」と書くように、二人の人間の関係の中のものです。一方、「義」には「みんなのために」という要素が含まれるので、あわせて「仁義」というと、「思いやりや愛をみんなに」という意味合いになるそうです。ただ、この定義も空間的イメージでし

か捉えていないのではないか、と守屋さんは指摘しています。人と人が思いやりや愛を施したり、施されたりするのも仁義だけど、例えば、親と子、孫の間には、「育む」といった行いもある。これも仁義だと守屋さんは言います。育むというのは、いますぐ何らかの成果を得ようとするのではなく、将来のことを考えた行いです。つまり仁義には時間的な軸もあるんじゃないか、というわけです。そうすると、仁義とは「思いやりや愛を空間的に、育む」というのを時間的に、みんなに広げる」という意味になります。そう理解するとい言言葉だなど思うようになりませんでした。

そう考えると、すごく腑に落ちたのは、民主主義には乗り越えられない限界があるということなんです。それは何かと言うと、現在の民主主義は選挙で投票できる人の意見しか反映されないということなんです。未成年は投票できません。まして、まだ生まれていない子どもたちは一票を投ずることができない。でもいま何が起きているかと言うと、莫大な公的負債で、成長と言うか、いまを維持するために、お金をどんどん借りて、まだ生まれていない世代にツケを回している。民主主義というものは、時間的な要素が入りにくく、

意識がないとか……。でも、それだけだと、老人が若者に「駄目じゃないか」と叱咤しているだけの、よくあるパターンです。ところが、『論語と算盤』の中には、「大正維新の覚悟」という章があって、このまま続けば将来悔やむ状態に陥るかもしれないというように書いてあったんです。つまり、渋沢は時間的観点から国の将来を憂えていたわけです。

今日の状態で経過すれば、国家の前途に対し、大いに憂うべき結果を生ぜぬとも限らぬのであることを思い、後来、悔ゆるがごとく愚をせぬように望むのである。

【論語と算盤（大正維新の覚悟）】

私のイメージでは、大正というのは、それまでの日本で最も自由で豊かになった時代。一気に、四十〜五十年で先進国に追い付いた……それは錯覚かもしれない。かたがたけれども、いちばん豊かになった時代だった。なのに、なぜ渋沢は「これでは駄目だ」と言ったのか……。そこに引っ掛かったんです。

もちろん大正維新というものは実際には起こらなかったわけですが、渋沢の言葉通り、その後、日本は昭和の暗黒時代に入っていきます。「大正デモクラシー」

空間的なことしか考えられていないんですね。

ですから「仁」と「義」のある政治にするためには、いま投票権を持っている人、一人ひとりに仁義がないと、おそらく実現しないんです。時「問」と空「問」を繋げられるのは人「問」だけです。この三つの「問」が必要ということなのではないでしょうか。

「論語と算盤」がいまなぜ読まれているのか

渋沢栄一の『論語と算盤』がいま見直されています。私自身、以前は渋沢栄一という人をそれほど意識していたわけではなく、すごい先祖様に恵まれたなあ、という程度にしか思っていました。ある意味過去の人でした。

それが、渋沢栄一のことをもつとよく知りたいと思ったのは、二〇〇一年、私が投資コンサルタントとして独立しようと思いついたときでした。以前、親戚の集まりがあったとき、酒の席で叔父がこんなことを話したことがありました。

「昔、渋沢家には家訓というものがあつてな、そこには株と政治はやっちゃいかんと書いてあるぞ」

という言葉が飛び交い、一人ひとりの市民が社会をつくっていくという理想もあった。けれども理想は理想で終わった。それはなぜかというところ、流されたからではないかと思うんです。このときの日本人は軍部に流されました。そして流された結果、それまでに築いた市民の自由というものも失われてしまった。

もともと日本人には流されやすい傾向があるように思います。例えば宗教観です。日本のお祭りは、年に一回、神様を呼んで、踊ったり騒いだりします。そして、それが終わると日常に戻る。政治も祭りと同じで、「何とか改革」などと言って、一時的には、盛り上がるんですけど、祭りが終わるとすーっと引いてしまふ。日々、きちんと善い行いをしないと、将来、いいことは起こりませんよ、というのは多くの宗教に共通する考えですが、日本の宗教観は、前に何をやるうが、後に何をやるうが、パンパンと手をたたけば、いろんな神様が現れて、願いの事を聞いてくださる。神様オンデマンド。なんですよ。良い悪いではなく、そういう感覚が日本人の特徴としてあると思います。ただ、その危険性が「流される」ということではないでしょうか。現代の平成時代においては、デフレだ、

そのとき、私は勤めていた米国企業で、外債や為替、株式のマーケットの仕事をしていたから、本当に書いてあったのかな？と気になって渋沢栄一に関する資料を探してみると、本当に家訓がありました。そこには、叔父の表現とは少し違いましたが、「投機の業または卑しい職についてはいかん」と書いてありました。

私の仕事は、卑しい職には当たらないだろうと思いましたが、まあ投機といえど投機かもしれない。うーむ、これは困った。「不都合な真実」だと思いました。そこで、どこかに自分に都合の良いこととは書いていないかと、資料をさらに調べていくと、『青淵百話』という書籍の中に、今の言葉で表現すれば「リスクを取りなさい」という意味のことが書いてありました。これはいい！私の仕事にじっくりくる。ほかにももつと書いていかと思つて、資料をめぐつていくと、示唆に富んだ言葉がどんどん出てきて……。そこから、私の渋沢栄一研究が始まったんです。

渋沢の著述を読んで驚くのは、まさに現在のことが書かれているということなんです。事なかれ主義に陥っているとか、政府に依存する体質がいかにとか、当事者不況だと言われますが、どの時代よりも自由で経済的に豊かです。だけど、大きな時代のうねりとして、大正のあのころとどこか同じようなところにいるのではないか。また流されているのではないか。気付いたら、思つてもいない時代になっていたということにならないよう、いま、どうすべきか。そういう転換点にいま、私たちは立っているのではないのでしょうか。

渋沢に限らず、同時代の坂本龍馬や『坂の上の雲』といった書籍に、いまなぜ関心が高まっているかというところ、社会がなんとなん流されていることを、みんな分かっていて、原点に戻りたいと考えているからだと思います。それは単純に逆戻りの思考ではない、と思いたい。原点に戻って将来を見つめ直せば、いまと違った視点が開けてくる、という期待から関心が高まっているのだと思います。

道徳経済合一説が生まれた背景

渋沢栄一の生家は、埼玉県深谷市の豪農商家です。子どもの時分から『論語』などの古典を修養していたようです。若いころには尊皇攘夷の思想に染まり、

倒幕を計画しますが、外部からの変革に断念し、逆に一橋慶喜に仕えるようになります。その慶喜が將軍になったことで、洪沢も幕臣となり、一八六六年（慶応二）慶喜の弟、徳川昭武の随行員として、パリ万国博覧会や欧州各国を視察します。

そこで見聞したことが、その後の洪沢の人生を変えたと言ってもよいでしょう。例えば、そのころの日本では、商人や農民が武士と一緒に国の行く末を論じるなど、絶対にあり得なかった。ところがフランスに行くと、「銀行という金貸し屋が將軍さんと同じレベルで話をしており、それにびっくりした」ということを書き残しています。自分が知らなかったいろんな発見があつて、それをスポンジのように吸収した時期だと思えます。

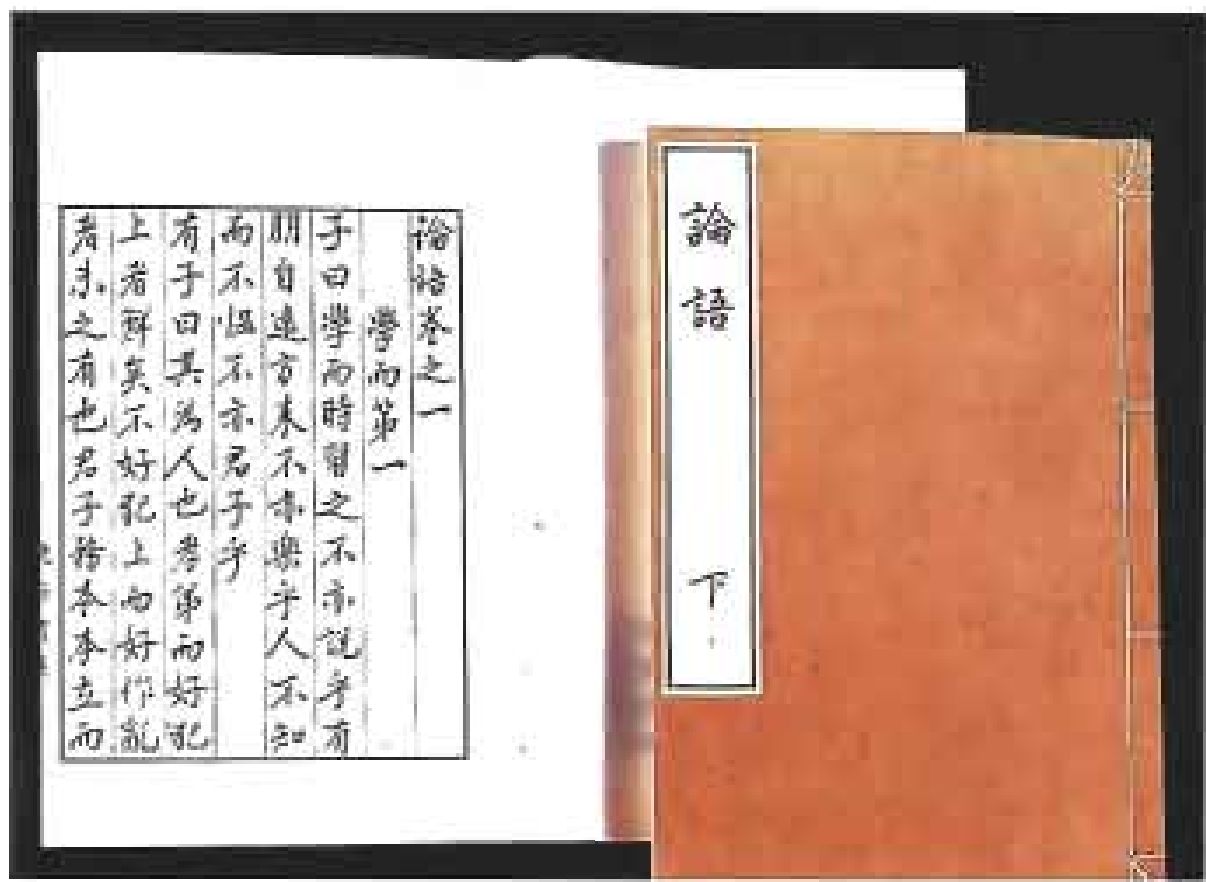
日本も百年前はもちろん途上国でした。いま、途上国諸国からの輸入品の安全性や品質が問題視されていますが、同じことが当時の日本にも言えたようです。それでは信用は生まれません。富をつくるのは商人である。ならば、商人は自分自身できちんとした行動を取り「信」を高めなければいけない。算盤（経済活動）だけじゃなくて「論語」（道徳）を身に付けるべきだ、というのが洪沢の考えです。

一方で、大きな違いは、岩崎は三菱という企業グループを後世に残したのに対し、洪沢はほとんど残していないということ。少し子孫に残してくれてもよかったです。うんですけど……。ともあれ洪沢には財閥という発想がなかったようです。岩崎は、事業はあくまで一人の才能ある人間が経営も資本も独占して行いべきという考えだった。あるいは「資本で企業を支配する」という合理的な考えだったようです。それに対し、洪沢は、経営者に才能がある人を置くことには賛成でしたが、滴が集まって大河になるように、資本、合本は広く募り、多くの人を集めてやるほうが結果的に大きな富を生む、という考え方でした。

そういう意味で洪沢は何かをつくって支配するというよりは、ほとんど新しいものをつくりたいという考えだったのでしよう。そうして五百社の設立に参与した。これは、いまで言うベンチャーキャピタルです。さらに両者が決定的に違うのは、岩崎

特に算盤は、それだけだとやり過ぎて、信を失うことになってしまふ。相手のことを思いやる道徳がなければ長続きしない。逆に道徳だけがあつても、算盤がなければ何の富も生まれません。だから両方とも必要だと喝破しているわけです。

近代経済学の祖といわれるアダム・スミスは「国富論」で、利己的な経済活動であつても「見えざる手」に導かれて社会公共の利益を増進させると述べていま



家は後継者に恵まれたということ。岩崎弥太郎は五十歳で亡くなりますが、弟の弥之助が跡を継ぎ、その後の三菱財閥の土台を築いていきます。一方、洪沢は後継者がいなかった。長男は実業より芸術関係を好み、実業にはそもそも関心も才能もなく、いずれ勘当されました。その子、洪沢敬三（私にとっては祖父の兄）は若いころに第一国立銀行（現みずほ銀行）の跡継ぎになります。本当は民俗学に進みたかったようですが、洪沢の子孫は二代、三代……と芸術に進んだ者や学者が多く、私を含めて後継者に恵まれなかったのではないのでしょうか。

一人ひとりが当事者として 実行するのが経世済民

私は小学校の二年から大学まで海外で育ちました。日本人というのは一人ひとりで見ると優れた方も多く、外国でも高く評価されています。ところが組織や国の単位になると評価されません。これはもったいないと思います。政界を見ても、一人ひとりだと魅力的な政治家もいらつしやるんですが、党としてみた場合、どうも魅力に欠けるんですね。九〇年代から日本の政治は二大政党を

す。これは、個人が利益を追求する自由を無条件に認めているかのよう誤解されていますが、実はその十七年前にスミスは「道徳感情論」という本を著して、その中で社会にはシンパシー（sympathy）が必要だと言っているんですね。シンパシーというのは、「共感」とか「同感」などと訳されますが、つまり「論語」で言う「仁」みたいなもの。思いやりや愛です。社会にシンパシーという土台があつて、そのうえで、自由に行動をすれば「見えざる手」が働く、そういう考えだつたと思うんですね。洪沢の言う「論語と算盤」も同じ意味だと思えます。

洪沢栄一と岩崎弥太郎、 その共通点と違い

同時代を生きた実業家、岩崎弥太郎（一八三四―一八五）と洪沢栄一はよく比較されますが、私は二人の共通点に関心があります。岩崎弥太郎は下級下士の生まれで、体制秩序がそのままと一生、浮かばれない身分。洪沢は、商家の生まれで、武家や代官からしばしば財産を取り上げられてしまう境遇にあつた。二人とも知識を持ち、かつ怒りを持っていた

目的にできました。ですが、これは二十世紀の産物ではないかと思えます。二十世紀のモデルとは、効率的に物事を分けるというもの。右と左、東と西、白と黒というように分ける。日本やアメリカ、ヨーロッパなどの先進国は、効率性、生産性を高める競争をしていたのだと思えます。ただ、この効率的に分けるというのは、日本人が結構、不得意なところだったのでないのでしょうか。

しかし二十世紀は違う。日本のような成熟した国もあれば、中国やインドのような新興国もあるし、アフリカのような発展はもう少し先という地域もある。よく言えば多様性、悪く言えば混沌。一つの正解があつて、そこを目指して進むという時代ではない。今世紀はその多様性をどう生かすかが大切で、それは日本人の感性に合っているのではないのでしょうか。「そういう考えもありますね。ああいう考えもいいですね、まあ仲良くやりましょう」という感じで、さまざまな意見をうまく調整する能力に長けている。また日本の歴史を振り返れば、古くは中国大陸から、明治以降は西洋から、さまざまな文物を取り入れ、日本化し、それをまた海外に発信してきました。多様性を受け入れ、発展させるという伝統があ

ります。大きな流れとしては、日本人が得意とする時代に入っていると思います。

ただ、先ほども言いましたように、日本人には流されやすさ、当事者意識の希薄さ、という悪しき傾向もあります。日本語で言う「公」は、英語の「パブリック」とは違います。日本の場合、私益と公益といえは自分のことですが、公的公益といえは、「自分と関係ないところ」という意味になる。「みんなでつくる」というニュアンスが英語のパブリックにはありますが、日本の公は、「誰かが、国がやってくれるもので自分とは関係ない」というニュアンスが感じとれます。

社会とは当然一人では変えられないと思うんです。が、しかし、一人から始まるものだとも思うんですね。一人の存在というのは統計的にすごいことで、奇跡です。私がいま存在するのは二人の両親が出会ったから。両親が存在するのは、それぞれの両親が出会ったから。そう考えると四世代前は十六人。この中に渋沢栄一もいますが、他の十五人の方も私にとって非常に大切な人たちです。十世代前だと約千人、二十世代前だと約百万人、三十三世代前だと約八十六億人……というのは数字の遊びですけど、私の先祖のすべての人が、たまたまお互い出会っ

たから、いまの自分がある。そういう意味で一人ひとりの存在は奇跡なんですね。経世済民というのは、そういう奇跡的な存在である一人ひとりが当事者意識を持ち、世の中を言葉によってつくりあげるといふこと。それが結果的に民を濟う、ということだと思えます。誰かにやってもらうとか、誰かに与えられたものがあるがたがるのではなく、自分自身が行動することです。

同じように、「常識」というものも、一人ひとりが育み創造していくものだと思います。常識という「おまえそんなことも知らないのか、常識がないな」というように、知識があるかないかという意味で使われます。しかし、渋沢は、常識というものは、「智（知識）」を持っていてだけでなく、同じく「情」と「意（意志）」が必要で、しかも、一定のものではなく発達するものだと思っています。渋沢は過去の常識や非常識と相対し、より正しい常識をつくらうとしていました。常識とは、すでにあるものではなく、自分たち一人ひとりがつくるもので、一人ひとりに常識があれば、それが社会全体の常識になると、そういう考え方だったと思います。

「オズの魔法使い」は、主人公のドロシ

ーがカンザスという常識の世界からいきなり非常識の世界に迷い込み、そこからどうやって元の世界に戻るかという旅を描いた物語です。そこで脳のないカシ、心のないブリキの木こり、臆病なライオンと出会います。気が付いたんですが、それぞれ「智」「情」「意」に対応しているんですね。洋の東西、時代を超えて共通するものだなあと面白く思いました。

事に当たりて奇矯に馳せず、頑固に陥らず、是非善悪を見分け、利害得失を識別し、言語挙動すべて中庸に適うものがそれである。これを学理的に解釈すれば、「智、情、意」の三者が各々権衡を保ち、平等に発達したものが完全の常識だろうと考える。

【論語と算盤（常識と習慣）】

私が立ち上げた「コモンズ投信」という会社では、いま、三十年という長期投資を行っています。将来の自分や子ども、お孫さん……大切な人のための投資です。日本の資本市場は長期資本が欠如していると言われていますが、そこに個人金融資産が流れ、民間企業の発展を促進するような、新しい常識をつくらうという仕事です。そうした中で、私がいつも、心

に留めている渋沢栄一の言葉があります。「楽しんで生きる」というものです。

ただこれを知ったばかりでは、興味がない。好むようになりさえすれば、道に向かって進む。もし、それより道を楽しむ者に至っては、いかなる困難に遭遇するも挫折せず、敢然として道に進む。

【論語講義（二）】

行動を起こすときには、まず知るといふことが大前提です。でも知っただけで

は何も始まらない。「好き」という感情があつて初めて行動を起こすことができます。だから「好む」は「知る」より力を持つものなんです。それでも壁にぶつかると挫折するかもしれない。でも楽しければ、何としても壁を突破しようとするので、前進することができます。さまざまな分野で成功した方にお会いしたときに共通して感じるのは、人生を楽しんでおられるなあということ。そんなオーラを感じるんですね。もともと楽しいから大変そうなお仕事も案外、

平気で乗り越えてしまおうでしょう。考えてみれば、「知る」とか「好きになる」というのは一人の世界のことですが、「楽しい」というのは人に影響を与えるものです。楽しそうにやっていると、みんな集まってきました。いまの言葉に直すと、「ソフトパワー」でしょう。奇跡的に自分は生まれてきたのですから、あらゆることに当事者なのだと思います。この人生、楽しんで生きようと、いつも心掛けています。



渋澤 健 しぶさわ・けん

シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役・コモンズ投信株式会社社長。1961年（昭和36）、神奈川県生まれ。小学校2年生から大学まで米国で育つ。83年テキサス大学化学工学部卒業。87年UCLA大学にてMBA取得。財団法人日本国際交流センター、ファースト・ボストン証券（NY）、JPモルガン銀行（東京）、JPモルガン証券（東京）、ゴールドマン・サックス証券（東京）、大手ヘッジファンド、ムーア・キャピタル・マネジメント（NY）を経て、2001年、シブサワ・アンド・カンパニーを創業し代表取締役に就任。08年9月にコモンズ投信会長職も兼任。現在に至る。経済同友会幹事、渋沢栄一記念財団理事、日本医療政策機構理事、健康医療評価研究機構理事、学校法人文京学舎評議員。